

〔資料紹介〕

蝠翔齋弘度編輯

『教訓古今道しるべ』六種

八 木 意 知 男

要 旨

天保八年（一八三七）、中備倉敷の絹商人蝠翔齋小野治右衛門弘度はかつて見聞し書き留めてあった心学教訓の至言を纏めて一冊とした。名付けて『教古今道しるべ』と言う。当該書は、広く流布したものと思しく、『国書総目録』及び『古典籍総合目録』には計十七本の所在が記されている。しかし、これ以外にも折々に見ることがあり、その実数は把握出来てはいない。そこで、此度、八木偶会の六本を略紹介し、以て『国書総目録』等への補追とするものである。

はじめに

岡山倉敷城下の絹商「舟尾屋」主人蝠翔齋小野治右衛門弘度が編輯した心学教訓書『教訓古今道しるべ』一冊が出版されたのは天保八年（一八三七）の事であった。

この『教訓古今道しるべ』は、弘度が商売にて諸所を巡る中で見聞した教訓、あるいは人に教えられた書物の内容等を書留めたものに依って編んだとされる。すなわち、弘度自身の言ではなく、弘度が強く感銘をうけ心に残った先達の言を一冊としたものである。

『教訓古今古道しるべ』は大層流布したものの如くで、『国書総目録』及び『古典籍総合目録』には写本一、版本十六の計十七本程が登載されている。勿論、丘園杉浦三郎兵衛の手許にも存し、『雲泉莊山誌卷之三 石門心学関係図書及資料』（昭和七年刊）の「第十一 心学関係教訓書 其一」にそれは知られ得る。

かかる中で敢えて当該書を紹介しようとするのは、『国書総目録』等への補遺と伝本間で生じる差異の実態を把握せんが為である。合わせて拙著『和解本善書の資料と研究』（平成十九年、京都女子大学研究叢刊46）の補遺である。

『教訓古今道しるべ』の構成

『教訓古今道しるべ』は、基本的に楮紙七十四葉袋綴の木版本として流布した。流布した木版本は、一部分の例外を除いて「天保八年」の年紀を有する。

その基本的構成は次の通りである。ただし、整理の都合上、各項の頭に私に通し番号(1)～(9)を付した。一見返し―書名、編者名、編者編集の言。此の一面全て青色摺り。

- 二序(オウ)
1(ウ) (1)醒慮(オウ) 2(オ) (2)松斎(オウ) 3(オ) (3)復軒(オウ) 4(ウ) (4)天遊(オウ) 5(ウ) (5)秀卿(オウ) 6(ウ) (6)蕉

- 窓 (9ウ) (10ウ) (7) 山田球 (11ウ) (11ウ) (8) 蓮阪 (12ウ) (12ウ) (9) 光海 (13ウ) (13ウ) (10) 朴齋 (14ウ) (14ウ)
- 三題字 (11) (12) 義明 (13ウ) (13ウ) (13) (14) 雲嶋 (16ウ) (16ウ)
- 四歌文 (15) 「誠」 (17ウ) (17ウ) (16) 「水戸光国 御御条目」 (17ウ) (19ウ) (17) 「五計」 (19ウ) (20ウ) (18) 歌五首 (20ウ) (20ウ) (19) 「家は小くとも」 文 (20ウ) (21ウ) (20) 歌句廿三首 (21ウ) (23ウ) (21) 鷹金文七等五人男事 (24ウ) (25ウ) (22) 「堪忍」 歌文 (25ウ) (25ウ)
- 五「孝」 題画賛 (23) 玉菫女 (象画、26) (24) 金峨 (父子図、26ウ) (25) 怡雲 (犬猫図、27) (26) 泰嶺 (母子図、27ウ) (27) 守義 (親子外出図、28) (28) 鳳冲 (復調理図、28ウ) (29) 暁如 (親子背向図、29) (30) 文藻 (親子図、29ウ) (31) 鶯卿 (親子図、30) (32) 載月 (老親図、30ウ)
- 六歌文 (33) 「細川三斎公八ヶ条」 (31ウ) (32ウ) (34) 歌文 (32ウ) (35) 狸々庵達磨図賛 (33) (36) 歌九首 (33ウ) (34ウ) (37) 元政歌二首 (34ウ) (38) 手嶋先生答歌十九首 (35ウ) (37ウ)
- 七画賛 (39) 中岳 (傀儡師図、37ウ) (40) 国华 (首綱引図、38) (38) 八歌文 (41) 歌句九首 (38ウ) (39ウ) (42) 「姑のこゝろえ」 (39ウ) (43) 「一切女子のこゝろえ」 (39ウ) (42) (44) 歌文 (42ウ) (42ウ) 九画 (45) 屏石 (正直神社図、43) (43) 十歌文 (46) 「先年関東に……」 文 (43ウ) (47) 「手嶋先生のいろはうた」 (44) (48) 「天満宮御歌」 (44ウ) (44ウ) 十一画賛 (49) 烟邨 (城図、45) (50) 鳳山 (韓信図、45ウ) 十二歌文 (51) 「そこなふ満心」 (46ウ) (47ウ) (52) 「太田道灌のうた」 (47ウ) (53) 「手嶋先生いろはうた」 (47ウ) (47ウ) (54) 「老人いはく」 (47ウ) (48) (55) 「なきよりよきはなし」 (48ウ) (48ウ) 十三画賛 (56) 周得 (信長図、49) (57) 雪居 (童遊図、49ウ) (49ウ)

- 十四歌文―(58)歌(50)オ(51) (59)「御代のはらつゝみ」(51)ウ(53) (60)「地震のうた」(53)ウ (61)「以身教者從、以言教者訴」(50)オ (62)「明明徳」(64)オ (63)「天地を恐るゝ心得」(54)ウ (64)「閑通和尚庭石の銘」(55)オ(56)オ
- 十五画賛―(65)可堂(農夫休息図、56)ウ (66)「白川候賛(自在鍵図、57)オ
- 十六歌文―(67)「此尻日より……」(57)ウ (68)「父のこゝろえ」(58)オ (69)「子の心え」(58)ウ (70)「母のこゝろえ」(58)ウ(58) (71)「母に対する子の心え」(58)ウ (72)「舅のこゝろえ」(58)ウ(59)オ (73)「嫁のこゝろえ」(59)オ(59)ウ (74)「姑に対する嫁のこゝろえ」(59)ウ (75)「兄のこゝろえ」(59)ウ (76)「おとゝのこゝろえ」(60)オ (77)「夫のこゝろえ」(60)オ (78)「妻のこゝろえ」(60)オ(60)ウ (79)「百姓のこゝろえ」(60)ウ (80)「細工人のこゝろえ」(60)ウ(61)オ (81)「商人の心得」(61)オ (82)「師の心得」(61)オ (83)「弟子のこゝろえ」(61)オ(61)ウ (84)「身を治る心得」(61)ウ (85)「世に交るこゝろえ」(61)ウ (86)「楠正成誓書」(62)オ(64)ウ (87)「大乘十來」(65)オ(66)オ (88)「歌句十二首」(66)ウ(68)ウ
- 十七画賛―(89)慶雲斎(鶴図、69)ウ (90)雲岫(亀図、69)ウ
- 十八跋文―(91)小寺廉之(70)ウ(70)ウ
- 十九―(92)稿人名録(71)ウ(73)ウ
- 二十一―(93)彫刻師名(73)ウ
- 二十一―(94)小野弘度画像・賛(74)オ
- 二十二―(95)刊記(74)ウ

ここに明らかな如く、画賛―歌文―画賛―歌文を織り成して内容に区分をつけると同時に、画賛は当代人作、歌文は先人のものと、「古今」を示した構成をとっているのである。

(94)の賛には「三十とせにひろひあつめしわがたから 　　たからを人にたてまつるなり」とあって、本書が施印本である可能性を示唆している。『和字功過自知録』が「善門 雑善類」に

一しごくよき書物をつくる一善
十善

一印施してひらむる一善
十善

とするのを承けると思量されることである。

紹介諸本

ここでは八木偶会の個人蔵六本を紹介する。版本四本と写本二本であるが、何れも『国書総目録』等には未載のものである。

A本―縦228耗×横157耗、楮紙袋綴、版本。表紙は黄土色。題

箋は書き題箋。

見返しは青色摺り。

四周単辺の匡郭内は縦190耗×横132耗、一面八行。版心は

「教訓」、丁付有り。

「五味文庫」旧蔵本。此本は第63丁が落丁、第64丁が二

葉存す。すなわち(86)「楠正成誓書」部分に乱れがある。

なお、表紙の色相は版本に共通するか。

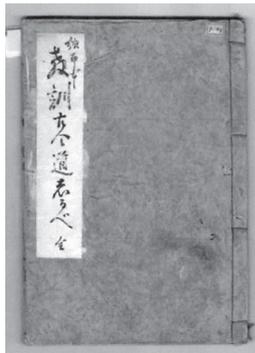


図-1 (A本) 表紙

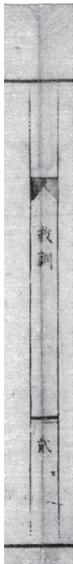


図-2 (A本) 版心部分



図-3 〈A本〉見返部分



図-4 〈A本〉第74丁オ・ウ 全ての版本に備う。

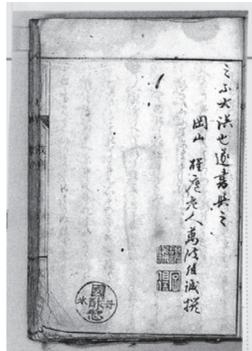


図-6 〈B本〉第2オ部分
丸墨印 (25%大)



図-5 〈B本〉表表紙

B本—縦220糎×横153糎、楮紙袋綴、版本。四周单边の匡郭内は縦190糎×横131糎。題箋の跡は残れど無し。黄土色表紙と見えるが擦れが甚しい。版心はA本に同じ。一面八行。丸墨印「丹／国酢惣／氷」有り。卷末に蔵書記「本家／足立惣右衛門／所持」「読かきや算用の義しらざれハ／人と生れて人乃甲斐なし」有り。本書は天地の余白部分が著しく小さくなっている。

C本—縦222耗×横147耗、楮紙袋綴、版本。但、綴じ糸は後補。黄土色表紙に、第42ウに見える「遺文三十軸、軸々金玉声」を書き、題箋にも及ぶ。故に題箋に記された原文字は不誦。匡郭内は縦189耗×横126耗。一面八行。版心はA本に同じ。本書は第26丁及び第44丁が落丁。

D本—縦222耗×横153耗、楮紙袋綴、版本。黄土色表紙に青緑色の題箋。題箋には子持ち罫を引き「訓古今道しるへ 全」と有り。

匡郭内は縦190耗×横131耗、一面八行。青緑色の題箋は、**B・C本**に僅かに残る滓からして原形かと考えられる。

E本—縦246耗×横167耗、楮紙袋綴、写本。黄土色地に丁字引きの表紙、題箋はなく打付書に「訓古今道しるべ 全」と有り。

墨付全45丁、一面八行。表紙に

紀元二千五百年／即明治十三年九月写之

と打付書きされており、巻末に

紀元二千五百年／即明治十三年九月写之／莊林貞治郎／藤原兼英

写之

〔資料紹介〕 蝠翔齋弘度編輯『訓古今道しるべ』六種



図-7 〈C本〉表表紙

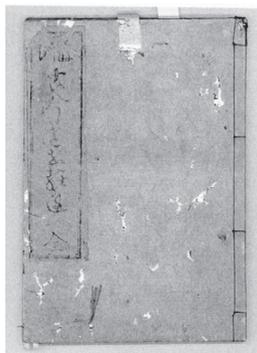


図-8 〈D本〉表表紙

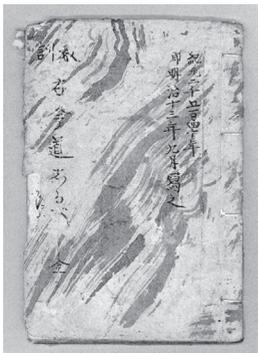


図-9 〈E本〉表表紙

とある。明治十三年（一八八〇）に「莊林貞治郎」が写書し、それを又「藤原兼英」が写したのか。

一・二・三の部分及び十八〜二十二部分は全て省かれ、また画賛部分は贊のみを纏めて全体の末に写している。すなわち序跋や画がないのである。

F本—縦246耗×横172耗、楮紙袋仮綴、写本。墨付全十五丁、一面十〜十四行。

題箋はなく、表紙に

明治十五年四月寫早書訓古今道しるべ／小西邸／大槻湖重郎印

とあり、明治十五年（一八八二）の写し。

第16才の(13)雲嶋〜第69ウの(90)雲岫までを備うが、画は一切無く、画賛部分は贊のみである。

また、第69才の(89)慶雲齋画賛は欠けている。この欠は故意になされていると思し、当該箇所と見セケチにされている第49才の(56)周得（信長図）では版本は贊歌を左から右へ記している。故に右から読むと意味をなさない。従ってこの両者は省略方向へ進んだと思量される。このことは、F本が版本を書き写したものである可能性を示している。



図-11 〈D本〉による第49才部分

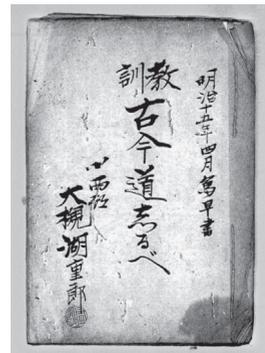


図-10 〈F本〉表表紙

おわりに

例えば、第51ウから第53ウにかけて「御代のはらつゝミ」と題する一文がある。

あめつちのまことのミちハ明らけき月日のめくミたかひなく、春ハ花さき秋みのり、目出たく治るあめか下、弓ハ袋に矢ハはこに、よろひかふとゝいふものハ五月人形に見たばかり、屏風ふすまや絵双紙にからややまどのいくさ事、能やうたひや芝居⁵¹ウ もの見たり聞たりなぐさむもいま太平のおかけそや、飢すこどえすくらす事、いかなるくはほうのうまれそや、耕作すれば田畑あり、麦米粟稗何なりと心まかせに作り出し、野あるき山あるきしたとてもゆび壺本さすものなく、江戸長さきへいたとてもこちに無理せず無理い⁵²オ はねは、つぶてひとつものなく、河には橋かけてあり、橋なき所は船渡し、馬をやるうか駕をやるうか、はらかへつたら一せんめし、日かくれたらハはたこやど、あまさけ上かんあんはいよし、あんまり御ちそふか過るゆへ、おり／＼御料理のくひ過し、づゝうふくつうしやくつかへ⁵²ウ 節季にむねをいためたり、ぶんさんかけをちくびくゝり、ミなこれ御馳走過るゆへ、なんぼ御ちそうなされてもはらかへらねはくはぬかよし、いふてわるひハいはねかよし、のんでわるひはのまぬかよし、買ふてわるひはかはぬかよし、そこでおなかゝあんばいよし、親子にこゝ⁵³オ 夫婦中よく天下太平に治る

あすからハあだに明日ををくらじと

おもひしかどもけふもくらしつ

地震のうたに

世の中のおこりハじしんこゝろから

ゆすりすこすと家ハつぶれる

むつくらと丸かどあれや人こゝろ

あまりまるきもころびやすけれ」^{53ウ}

○読点を私に付した。

○漢字は現在通行字体に改めた。

○濁点はマ、であり、手を加えてはいない。

右のうち、「あすからハ」歌は『玉葉集』巻第十九、釈教歌、二七〇五番歌、慶政上人詠であり、守本恵観編『心学道歌百首和解』（明治十九年刊）にも採歌されてある。『御代のはらつゝミ』（『御代腹鼓』）（寛政九年序）は小冊として出された心学書。すなわち『御代のはらつゝミ』が『玉葉集』二七〇五番歌を引き、これを『心学道古今道しるべ』はそっくり引いているのである。これは心学書における一般的な手法である。そして、これにすぐ続けて「地震のうたに」が配されている。故に、『心学道古今道しるべ』は、心学書一般に倣って編集されたと考えられる。

そうであれば、A本の第63丁が欠け、C本の第26丁・第44丁が落丁しているのは、全くの偶発に依るものであって、恣意ではないことになる。A本あるいはC本が敢えて当該部分を欠丁しなければならない理由が無いからである。

本書の書名は、外題は『心学道古今道しるべ』であり、内題は『教訓古今道しるべ』である。『国書総目録』や『古典籍総合目録』は内題に従い、

心学道古今道しるべ 全 一冊 蝙蝠齋 天保八年

『雲泉莊山誌』卷之三、五〇頁

とする杉浦丘園は外題に従っていることになる。これは『国書総目録』等が

㊦ 古今道しるべ

とし、『古典籍総合目録』が

金沢市村松（古今道しるべ）一冊

と登載する所以でもある。角書は時に省略して称される故、「教訓」語が略される場合もあったのである。何れにしても、本稿は『国書総目録』等への補追をなしたものである。

注

ここに序を寄せ画賛を寄せた錚々たる人人は、当時吉備三国の名士。書画家が多いのは絹商としての付き合いがあった故であろう。72才〜73ウの『稿人名録』には次(図12〜図15)の如くあるが、

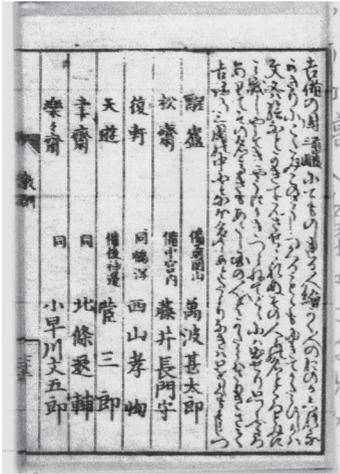


図-12 72才



図-13 72ウ

- (1) 『岡山和歌俳諧人名辞典』(道原正一著、思文閣)
 - (2) 『詩漢文学者総覧』(長澤孝二編、汲古書院)
 - (3) 『和学者総覧』(國学院大学日本文化研究所編、汲古書院)
 - (4) 『神道人名辞典』(神社新報社)
- 等を便に若刊名の解説をしておく。

ア 醍廬萬波甚太郎

字は伯信、別号を復堂、天保十四年歿。岡山藩儒にして閑谷学校教授。

イ 松斎藤井長門守

松斎は藤井高尚の号、別号松ノ屋、少くして小寺清先に国学を学び、後本居宣長の門に入る。入木道は梨木祐為につく。備中の吉備津宮々司。天保十一年歿。その著『伊勢物語新釈』は白眉なり。



図-14 73 才

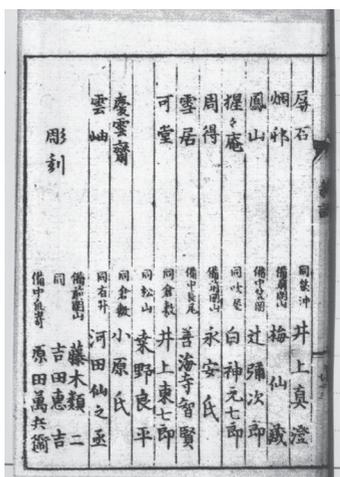


図-15 73 ウ

ウ 天遊菅三郎

菅茶山の甥、自牧齋また良庵と号す。頼山陽等に儒を学ぶ。万延元年歿。

エ 聿齋北條退輔

北條退輔は志摩的矢出身の備後福山藩儒北條霞亭の息男。間軒あるいは秋佳と号す。詩をよくす。

オ 楽々齋小早川文五郎

小早川文吾と通称し、楽々齋と号す。小早川憲という。明治十三年歿。

カ 蕉窓奥田庄蔵

備中高梁藩士。名を盛香、号を楽山・蕉窓・五愛楼等いう。中井履軒・菅茶山に学ぶ。万延元年歿。

キ 球山田安五郎

山田安五郎は方谷と号し、字を琳卿という。備中松山高梁藩儒、明治十年歿。世に閑谷学校再興を計ったことで知らる。

ク 蓮陂今村左橘

福山藩士今村五兵衛は蓮坡・退翁・耦風居と号し、士孟・綽夫等と字す。安政六年歿。

ケ 光海小寺監物

小寺監物、名は清之、字は光海、号は棟園。小寺清先の長子にして神島の稲荷神社宮司となる。天保十四年歿。

コ 廉之小寺帯刀

小寺清先の次子。

サ 雲鵬小埜貞三郎

小野貞三郎は、初め湘雲と号し、後に雲鵬と号す。書家として名をなすが、岸駒等に学んだ画を以て丹波亀山藩の絵師となる。

歌は小野務（通称本太郎、安政元年歿）の門に入り、『鯁玉集』六編「雑部」に「浦島子」題にて入集する小野機その人である。

安政三年歿。

〔資料紹介〕 蝠翔齋弘度編輯『教訓古今道しるべ』六種

シ 屏石井上真澄

名を謙満・弦丸、号を屏石・楠堂という井上真澄は、平賀元義の門にして足高神社祠官。歌人として名がある。安政三年歿。

ス 慶雲斎小原氏

慶雲斎は姓を小原、称を三左衛門・三郎右衛門・広輔、字を子典、名を常之・輓、号を慶雲斎・旭岡・蘆汀、屋号を宮崎屋、と称す。井上端木がこと。和歌を小沢蘆庵に学び、『鴨川集』に入集。画を岸駒に就いて修め、鶴の画を能くして法橋に叙せられる。天保十一年歿。家集に『鄙塵集』あり。

(本学名誉教授)